

特派員時代のエピソード 「どちらが地球の裏側!？」

アンの舞台から転じて、かつての特派員時代の面白い話をいくつかご紹介してみしましょう。

特派員として海外にいた期間はちょうど十年間、訪れた国は三十二か国になります。以下はそこで体験したエピソードの一端です。現在からはIT時代に入り、海外から日本に原稿を送る手段にも大変な変化が起っています。ふだんの生活でも、文字を相手方に送るのにはFAXやEメールが当たり前になってきていますが、約三十年前、私がパナマに赴任した当時は、FAXさえもまだ開発されていませんでした。体験談のように急がない原稿は航空便で、ニュース性の急ぎの原稿は電話で送ったものでした。

書いた原稿を電話口で読み上げます。それを、本社担当記者が、短ければそのまま書き留め、長ければテープに録音し、それを再生するわけです。そのとき

まず電話口での最初のあいさつにとまどつたものでした。時差の問題です。

例えば、ブラジルで、すべての取材が終わって原稿をまとめ送るのは夜の十時頃。ところが日本では朝の十時。ブラジルと日本の時差はちょうど十二時間あります。こちらはホテルのあまり明るくないライトのもつとで「コンバンハ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウ」「サイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れで寝酒の時間なのですが、電話の相手は朝の空気を胸いっぱい吸いながら、モーニングコーヒで一番張り切っているときなのです。

そう、ブラジルといえこんなエピソードもありました。地理的にはちょうど日本の真反対にあります。

これをあてる時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言っていた、ずいぶん反撥されたことがありました。「なに言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか!」。たしかにその通りですね。丸い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものかなり違っています。図法にもよりますが、メルカトル図法で描かれた日本の地図では日本が地球のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸、アフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にあります。

ところが、あちらの地図では真ん中に北南米大陸が描か

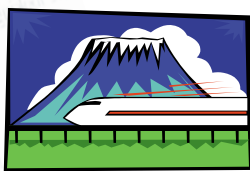


清水武 Takashi Shimizu 旅行作家 世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。東京都・昭島市在住
http://homepage.nifty.com/donky/

れています。ですから、日本の位置はというと、地図上ではずっと左上の端、日本の地図で見るとイベリア半島、つまりスペインの端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますが、メキシコの地図ではどうでしょうか。

もう一つは人種の混交です。よくニューヨークは人種の坩堝(るつぼ)とも言われていますが、ブラジルも私の駐在していたパナマシティも同じでした。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。「セニョール・シミズ、日本での研修会は素晴らしいです。世界からの仲間に出会うこともできました。日本人は本当に親切で感激しました。でも、驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオと、新大陸の発見以来、ヨーロッパから



やってきた白人、それに運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、百人集まれば百人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言にもうなすけるような気がしません。もつとも、近年は日本もさまざまな国の人が住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが。

次回はこうして海に囲まれ、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についての小咄を紹介してみたいと思います。

